

『わが西遊記』の成立

中島敦の作品には、現在でも成立時期のはっきりしないものが多い。中でも『わが西遊記』については今までにも様々に論議されてきており、諸説が入り乱れている状態にある。そしてこの「悟浄出世」と「悟浄歎異」の成立時期をどちらが先でどちらを後とみるかによって、作品世界および文体、構成、さらには作家自身の内面の成熟といったものの分析にも大きく影響が及んでいるのがこの作品の現在の研究状況である。本稿ではまず、その位置づけの現状を整理し、『わが西遊記』二篇の成立時期に関して現存する資料を洗い直すことから始めてみたい。

丸尾 実子

1

『わが西遊記』は「悟浄出世」と「悟浄歎異」の二篇からなる作品である。しかし、これらの執筆時期はよくわかっておらず、多くの疑問が残されている。つまり、原典となった『西遊記』に沿ったストーリーの展開から見ると「悟浄出世」が前篇となるのだが、脱稿時期は後篇「悟浄歎異」の方が先ではないかという疑問がいまだに消えていないのである。この執筆時期に関して最初に問題提起したのは、郡司勝義氏による筑摩書房『中島敦全集』作品解題

(二九七六・九)であった。以下、その中で郡司氏が問題提起にあたって用いた材料を列挙してみる。

・第一に、中島は「西遊記」を南洋行き(昭和十六年六月二十八日出発)の前に書き上げたい意志を次のような形であらわしていた、ということ。

『世界がスピノザを知らなかつたとしたら、それは世界の不幸であつて、スピノザの不幸ではない、といふ考へ方は瘦我慢だと思ひますか?』とにかく、僕は、そんな積りでもつて、西遊記(孫悟空や八戒の出でくる)を書いてゐます、僕のファウストにする意気込みなり。』(昭和十六年五月八日 田中西二郎宛葉書の中)

『南洋へ行く前に書上げやうと思つて、西遊記(孫悟空や八戒の出でくる)を始めてゐますが、一向にはかどりません。ファウストやツアラトゥストラなど、余り立派すぎる見本が目の前にあるので、却つて巧く行きません。』(同年六月上旬 深田久弥宅に「古譚」持参時に書かれた名刺裏の置き手紙の中)

・第二に、南洋から帰つた中島が『中央公論』誌への執筆依頼に応えて渡した原稿を読んだ杉森久英氏が、昭和十七年七月二十二日付の書簡で「弟子、大へんおもしろく拝見

しました(略)悟浄出世の方はやはり少し落ちますね。」と感想を述べているということ。

・第三に、「悟浄歎異」の原稿の文末には「(昭和十四・一・十五)」の記入があり、赤鉛筆で縦に二本の線が引かれていること。

・第四に、中島がよく原稿をみて貰つていた深田久弥氏が生前「悟浄歎異」を全く読んでいなかったと話しており、もし文末の記入どおり、この作品が南洋に行く前に書き上がったのならば、「斗南先生」「虎狩」「過去帳」二篇などは深田氏の閲覧に供しながら、それらより遙かに小説的であるこの作品をなぜみて貰わなかつたのか、という一抹の疑問が残るということ。

郡司氏は、これら四点から、「(「悟浄歎異」の)実際の完成年次を決定するために現在残された手段は、他の作品の主題の發展展開の相互関係および文体の成熟の度合といふ甚だ高度な、しかも主観的な方法だけであらう。文末の昭和十四年説を採ると、「悟浄出世」を昭和十六年か十七年とするならば、続篇の方が二三年前に完成され、前篇があとに出来上がったといふことになる。歿年から逆算して、この四五年の間の急速な文学的成熟から考へてみて、この

仮定には不自然なところがないかどうか、といふ問題が今後に残されよう。」と、問題を提起したのである。以来、この郡司氏の掲げた問題が、氏の言うままに問題とされ、氏が「現在残された手段」としている、「甚だ高度な、しかも主観的な方法」を試みるのが、『わが西遊記』の研究において行われてゆくことになる。

奥野政元氏⁽¹⁾は、この問題を保留すると明記して作品を論じた。佐々木充氏⁽²⁾、勝又浩氏⁽³⁾は、後篇が先に書かれたものとしている。山下真史氏⁽⁴⁾は、郡司氏のいう「甚だ高度な、しかも主観的な方法」によって各篇の完成度に独自の見解を示し、「悟浄歎異」が昭和十四年、「悟浄出世」が昭和十七年に書かれたと「時代を特定」して作品を論じた。筑摩文庫や角川文庫の巻末の作者年譜にも、「昭和十四年に『悟浄歎異』脱稿／昭和十七年に『悟浄出世』脱稿」とあり、現在では、この〈前篇・後篇成立年代逆転説〉⁽⁷⁾が、もはや定説となつてしまつたようである。（講談社文芸文庫巻末の記載によると、実際はもう少し後か⁽⁸⁾と追記してある。）

この流れに対し、木村東吉氏は、「『悟浄歎異』十四年説

再考」として、この〈前篇・後篇成立年代逆転説〉に疑義を唱えた。今や定説ともなりかけているこの説に関する反論自体、非常に少ないのだが、中でも、その考察の過程で、郡司氏のいう〈主観的な方法〉を試みるのではなく、郡司氏の切り捨ててしまつた方法、すなわち、もう一度、残された資料を検証し直すという方法をとつたのは、私の調べた限りではこの木村氏だけである。

木村氏は「悟浄歎異」浄書原稿末尾の日付を、作者が作品の構想を得た日と仮定し、さらに「悟浄出世」の実質執筆期を昭和十四年末～十五年初頭ごろ、「悟浄歎異」の草稿執筆期を十六年五・六月ごろであるとし、両篇の最終脱稿期は十七年夏であるという結論を出した。氏がその根拠としたものを、資料を補足しまとめると以下の五点となる。（氏は資料の面から論じたあと、内部徴証について見てゆき、二篇の成立の逆転説に従つて読んだ場合に、作者の文学的主題展開のありかたに生じる疑問を述べてゆくのだが、それについては本稿の主旨ではないので省略する。）

・第一点は、昭和十七年夏ごろ使用されている「ノート第四」に「悟浄歎異」関連の以下のメモがあること。（氏は後に「中島敦の『歴史』——堀辰雄を視座として」⁽⁹⁾の注でこの

説を撤回し、これを、続篇の創作計画・資料をメモしたものと捉え直している。)

七十二般、地煞變化法、魴斗雲、如意金箍棒、

羅刹女、——翠雲山芭蕉洞

玉面公主、積雷山魔雲洞

俺おんま呢にはつめい叭うん叭うん

火焰山——祭饗國〔3セ〕

・第二点は、昭和十六年五月八日の田中西二郎宛書簡および十六年六月の深田久弥宛名刺裏置き手紙に「孫悟空や八戒の出てくる」西遊記」とあり、「悟浄出世」にこれらは登場しないことから、この手紙にあるのが「悟浄歎異」であると思われること。

・第三点、原稿末尾の日付メモを、ただちに作品成立期と断ずるのは早計であること。

・第四点、「悟浄歎異」の原稿用紙の使われ方。(以下に列挙)

〔草稿〕・「東京原稿用紙H」(第1～15枚目)……他に「狐憑」「木乃伊」の原稿にも使用さ

れた戦時中の粗悪な規格判ザラ紙の原稿用紙

・「伊東屋製No.80」(第16～21枚目)……他に、A・ハクスレー「パスカル」翻訳に使用された原稿用紙

・「MARUZEN II」(第22～28枚目)……他に「斗南先生」「虎狩」「過去帳」二篇および『光と風と夢』に使用された原稿用紙

〔原稿〕・「MARUZEN V」……他に、「南島譚」三篇浄書原稿用紙

・第五点、昭和十四年と十五年の手帳に「悟浄出世」関連の以下のメモがあること。

〔昭和十四年〕 沙紅 エビ也

〔昭和十五年〕 天龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、

迦婁羅、緊那う、摩睺羅伽、人、

非人、

このように木村氏は、五点の根拠をあげている。しかし、この五点だけでは、成立年代逆転説を覆すには材料が少なすぎる。まず、第一点と第五点のメモはかなり有力な論拠とはなるが、材料メモの発見によつて推定構想時が遡ることはあつても、既に使用した材料を次の目的のために再び記すこともある以上、それより前に作品が存在していないとは言いきれない。二点目の〈西遊記（孫悟空や八戒の出てくる）〉という記述の場合も、本物の『西遊記』自体が「孫悟空や八戒の出てくる」ものである以上、『西遊記』そのものを説明するために用いたフレーズとも考えられ、「悟浄歎異」の方のみを指している言葉と断定することはできない。三点目も従来の説がそれを根拠とするのに問題があるのは確かだが、かといって、それを覆す決定的な説得力はない。第四点も、「悟浄出世」に関する用紙が原稿・草稿ともに残つておらず、「悟浄歎異」原稿の用紙（MARUZENV）も昭和十一年を製造販売開始とする用紙⁽¹⁰⁾なので定説を覆すには到らない。（しかし、同じ用紙が使われている中島の他の作品の執筆推定年代などから、定説を覆す余地も残されている。）

これらのことは木村氏も感じていたはずである。ゆえ

に、氏は〈これらを総合すると、『わが西遊記』の第二篇「悟浄歎異」を昭和十四年に、第一篇「悟浄出世」を昭和十六年に書いたとする積極的な理由は何もなく、先の結論が最も妥当ということになろう。〉とまとめ、次なる作業、内部徴証に移つたのであろう。

しかし、主観に陥りやすい内部徴証よりも、もう少し執拗に残された資料を再検討し、木村氏の〈逆転説再考〉を引き継ぐ必要があろう。

現存の「悟浄歎異」の草稿・原稿の用紙について、原稿末尾の日付メモにとらわれず、それぞれと同じものが使用されている他の作品との関係で考えると、「悟浄歎異」の草稿は昭和十三―十五年頃の作品と同じ用紙、浄書原稿の方は南洋から帰国後（昭和十七年以降）に書かれた作品と同じ用紙が用いられていることから、単純に考えて、完成は昭和十七年という可能性が指摘できる。原稿末尾の日付メモも、それが朱線で消されていることから、この可能性を否定する材料にはならない。

それでは、全集の「悟浄出世」作品解題で引かれている杉森久英氏からの書簡はどう解釈したらよいのだろうか。書簡には、「悟浄出世の方はやはり少し落ちますね。」と書

かれている。今まで問題にされてきた『わが西遊記』の前篇・後篇成立年代逆転説の最大の根拠となっているのはまさにこの手紙であり、これが「わが西遊記の方は……」と書かれてあれば、〈逆転説〉も出なかったのである。

しかし、杉森氏が「悟浄出世……」と書いているからといって、それを文字通り「悟浄出世」だけであつたと受け取って良いものだろうか。ここで、当時杉森氏が手にした原稿の姿を少し想像してみる必要があるように思う。——おそらく、氏の手には、二冊の綴じられた原稿があつた。

そのひとつの頭には、表題として「弟子」と大きく示されていたことだろう。これは間違いない。では、もう一冊の方はどうか。その頭には「悟浄出世」とだけあつたのではないだろうか。——どうして「わが西遊記」ではないか。

なぜなら、『わが西遊記』という題は、両篇の末尾に「——わが西遊記の中——」という形でしか存在していないからである。そして、後篇「悟浄歎異」も前篇である「悟浄出世」の続篇として「悟浄出世」の原稿の下に順番通り綴じ込まれていたのではないだろうか。二篇まとめて綴じられた冊子の頭にあつて直接目に入る表題は、一篇目の題である。

さらに田鍋幸信著『中島敦・光と影⁽¹⁾』の中に、「聞き書き」として、杉森氏の「中島さんに会った時のこと」という回想が収録されており、その中に氏の、次のような発言がある。

《私は当時中央公論社の出版部にいまして（略）「光と風と夢」の出版を申し込みました。しかしこれはすでに筑摩書房の方に約束があるとのことでした。（略）結局「光と風と夢」の方は断念せざるを得ず、その代りに後から「弟子」などの脱稿を知らされ、六月末に再度伺って新しい原稿を持ち帰ったのだと思います。

その時の原稿ですが、「弟子」はとにかく、「悟浄歎異」、それに「悟浄出世」があつたかどうか、「悟浄歎異」の方は字を覚えていたので間違いありませんが、「悟浄出世」の方が今一つ記憶がはっきりしません。或いは二つともあつたかも知れません。》

杉森氏は、当時の日記を空襲で焼失しており、その「聞き書き」の中でも、自らの記憶がさだかではないことわっている。それゆえ、私達もこの回想をうのみにする訳には行かないのだが、ここで氏は、確かに「悟浄歎異」があつた、と述べている。田鍋氏がもう一步突っ込んで、当時

の書簡の文面と今回の回想の違いを指摘するとよかったのだが、その杉森氏も今はこの世にはおられない。また、再度聞く機会があったとしても、氏は日記を空襲で消失したのではっきりとしたことは言えないと繰り返したであろうし、これ以上のデータは得られなかったであろう。——しかし、もしこの回想にあるように、氏が「悟浄歎異」を當時手にしたことが確かならば、氏のかつての書簡の「悟浄出世は……」という言葉も、この一篇のみを指したものは決してなかったことになる。つまり、『わが西遊記』の前篇と後篇の成立時期が逆転しているなどという説も成立しなくなるのである。中島が南洋に行く前からずっとあためていた「悟浄出世」「悟浄歎異」が、南洋からの帰国後、二篇とも一緒に浄書原稿として脱稿されたと考えたい。

(*「中島敦・光と影」は平成元年発行であり、全集解題作成時には、まだ存在しておらず、郡司氏が提起した疑問も、当時の材料からいうと当然のものであった。しかし、その後新たに出現したこの杉森久英氏の発言によって、かつての書簡の文面による誤解も取り除かれるものと考えられる。)

2

今まで考察してきたように、昭和十七年に『わが西遊記』二篇が脱稿されたとするならば、「悟浄歎異」末尾の「昭和十四年……」の記入は、やはり虚構ということになる。中島は、なぜこのような虚構の日付を記入したのだろうか。——そこで、次にその日付が彼にとつてどのような意味をもっていたのか、そして『わが西遊記』という構想が、その日付とどう関わるのかを考えてゆきたい。

『わが西遊記』は単行本『南島譚』(昭和十七年十一月十五日 今日の問題社刊)に、『過去帳』二篇、『南島譚』三篇、『古俗』二篇と一緒におさめられている。これらの原稿は、中島の書簡によると、九月八日にすべて書き上げて担当者に渡されたものである。例の日付もその頃に書き込まれた可能性は高い。

『過去帳』二篇の末尾にも同じような疑惑の持たれる日付の記入がある。筑摩書房の全集解題によると、「かめれおん日記」の方は、「(昭和十一年十二月二十六)」と記されており、この「十一年」の「十一」は一度「十二」と書

いて「二」を「一」に直し、さらにこれを縦線を引いて消して、横に「十一」と改めて書き直したものであるという。そして「狼疾記」の方には「昭和十一年十一月十日」の記入があり、この「十一年」ははじめ「十二年」と書かれたものをこの「二」をひとつに書き潰して「一」と見えるようにしてあるそうである。（『過去帳』二篇は、表題や細部は少しちがうにせよ、中島の友人からの手紙や、深田久弥氏の話及び、草稿に使われた裏紙（生徒の答案用紙 などから、脱稿推定年代は昭和十四年とされている。）

作品の書き上げと同時にその日付を本来にその通りに記入しているとしたならば、このように記入が乱れたりするものだろうか。やはり『過去帳』にせよ、『わが西遊記』にせよ、末尾の日付は中島が故意につけた、何らかの意味をもつ、虚構の日付なのである。

それではこの日付が書き込まれた頃に当たる、昭和十七年の夏とは、中島にとつてどのような時期であり、彼はどのような心境にあったのだろうか。ここで、筑摩書房『中島敦全集』を参考にして、少し年譜を整理してみたい。

昭和十七年

三月十七日……………南洋から帰国。

五月……………『文学界』に「光と風と夢」掲載される。

五月末～七月……………横浜に家を探している。

七月上旬……………書簡に、作家として立つ決意を表明する。

七月十五日……………処女作品集『光と風と夢』筑摩書房より出版。

七月末～八月六日……………妻子を実家へ帰している間、草稿・ノート・書簡類を多数焼却。

八月初旬……………南洋庁へ辞表を提出。

九月七日……………南洋庁の本官を免ぜられる。

九月八日……………「今日の問題社」に原稿を渡す。

この短期間に、転居・焼却・辞表提出といった、過去との訣別の行動や、作家として立つ決意・処女作品集出版といった新しい出発を期する動きが集中して見られる。彼にとつて昭和十七年の夏は、自分の過去を整理し新しい出発を期した時期であつたと考えられる。そして、その整理された過去において、『過去帳』や『わが西遊記』といった作品はその原稿末尾に記された日付に位置するものだった

のではないだろうか。つまり、作品に描かれている登場人物の精神の最終的な到達点が、その末尾の日付にあたる頃の中島自身の精神遍歴とちょうど一致するように、そこに記されているのではないだろうか。

『過去帳』という題もこの観点からみると非常に興味深いものがある。実際、現存原稿の中どこにも「過去帳」の文字は記されていない。これはかなり後になってつけた題のようである。

『過去帳』という題で、中島が「かめれおん日記」と「狼疾記」の二篇を括つたのも、やはり昭和十七年の夏と思われる。七月末―八月のあたりで、中島自身の手によって、彼の〈過去〉は選別の上に多数焼却（火葬）されてしまったが、しかし、〈過去〉をめぐるいくつかのエピソード及び展開する懐疑のエッセンスは残され、『過去帳』という形で括られたのではないだろうか。そして、〈過去帳〉つまり点鬼簿に、死者の没年を記すかのように書き留められたのが、原稿末尾の日付なのである。（中島の未完の長編「北方行」についても、作中に『過去帳』二篇と同様の懐疑が描かれていることから、その主人公の懐疑を『過去帳』に盛り込むことで、それ以上書き継ぐことも、脱稿することも止めたものと

考えられるのではないだろうか。）

『過去帳』（「かめれおん日記」と「狼疾記」の二篇からなる）には、主人公三造の、形而上学的懐疑の泥沼から抜け出すことができず、もがいている精神の状態が描かれている。

「かめれおん日記」の草稿には「蟲疾」と書いて消した跡のあることから、この主人公の形而上学的懐疑が、「狼疾」や「虫疾」と称するべき病であったことが推測できるのだが、この病は、後に『わが西遊記』において悟浄が罹っていた病と酷似する症状をもっている。つまり、『過去帳』の世界は『わが西遊記』において悟浄がすんでいた流沙河の底の世界であり、「悟浄出世」はその泥沼から抜け出す話、「悟浄歎異」は陸に上がった悟浄の「行為」を求めるべく始められた新しい遍歴と、遍歴の中で彼が心の奥に〈点火〉される話として読むことができるのである。（中島が『わが西遊記』を書くにあたって「見本」とした「ファウス」や「ツアラトウストラ」にも、遍歴の果てに主人公が懐疑や苦悩を乗り越えて自身の生き方やなすべきことを見つけた時、自らを燃焼させてゆくきっかけとして、心の奥に〈点火〉される場面がある。「悟浄歎異」の最終場面の〈点火〉も、これらと同様の意味が込められた表現と捉えることができる。）

繰り返すが、昭和十七年の夏は、中島が自分の過去を整理し、作家として立つ決意を固めた時期であつた。そこに至るまで彼はいくつもの《遍歴》をしてきたことであろう。そして、彼は『過去帳』として、自分の過去を整理して括り、その末尾に、ちようど『過去帳』に描かれている「懷疑」の渦中にあつた昭和十一年年末の日付を付し、さらに、彼が作家として立つ決意をするまでの精神の《遍歴》を描いた『わが西遊記』の末尾にも、また、それにふさわしい日付が一旦は選ばれ付されるのだろう。

このようなわけで、昭和十七年の夏に『わが西遊記』二篇が共に脱稿され、杉森久英氏に二部纏めて綴じた原稿が渡されたと考える。流沙河を出て、地上の遍歴をはじめるといふ悟浄の道行きに沿つた『わが西遊記』二篇の連続を再認識すること。《前篇・後篇逆転説》という誤解により遠回りを余儀無くされた『わが西遊記』の研究も、そこから再出発しなくてはならない。

『わが西遊記』の脱稿は、原稿が中央公論社の杉森久英氏に渡された昭和十七年六月である。しかし、先に述べたように、「悟浄歎異」の末尾には、朱線で消されているも

の「〔昭十四・一・十五〕」という日付の記入がある。現存する草稿と原稿の大きな違いは作品の最終部分である。草稿には、星を眺めてふと三蔵法師の眼差しの湛えているものに気付いた悟浄が、三蔵法師の寝顔を覗き込み寝息を聞く、その「静かな寝息を聞いている」(る)迄しか書かれておらず、以下三十七字分が欠けている。それこそが「渠」(悟浄)の《点火》の部分なのである。

《……師父は何時も永遠を見てあられる。それからその永遠と対比された土地のなべてのものの運命をもはつきりと見てをられる。何時かは来る滅亡の前に、それでも可憐に花開かうとする叡智や愛情や、さうした数々の善きものの上に、師父は絶えず凝乎と慙れみの眼差しを注いでをられるのではなからうか。星を見てみると、なんだかそんな気がして来た。俺は起き上つて、隣に寝てをられる師父の顔を覗き込む。暫く其の安らかな寝顔を見、静かな寝息を聞いてゐる中に、俺は、心の奥に何かがポツと点火されたやうなほの温かさを感じて来た。》

傍線で示したのが、この小説の原稿に書き入れられた末尾の部分である。このように原稿の形で《点火》が書き入

れられたのはいつか。昭和十七年三月に南洋から帰国して、六月の脱稿までの三カ月の間である。「悟浄歎異」はその殆どがその日付の頃に仕上がっていた。しかしまだ〈点火〉を記入するまでには中島敦本人自身が至っておらず、この部分の構想はありながらも悟浄の〈点火〉を記入する自信がもてなかった彼によつて、この作品は、完成することなく三年にわたつて放置されることになった。

そして、南洋から帰国し作家として立つ決意をした中島は、末尾が欠けたままになつていたこの作品を清書し、欠けていた箇所を決意みなぎる筆遣いで〈点火〉を書き入れ、自信の「ファウスト」である『わが西遊記』を第二部まで完成させたのではないだろうか。そして一度は、かつて殆ど完成させていた頃（点火）のくだり記入前）の日付を書き入れたものの、やはり思い直して朱線を施したのであろう。

また『過去帳』二篇の日付も、同じく昭和十七年夏に記入されたのではないだろうか。中島にとつて昭和十一年末といえば、手帳にパスカル「パンセ」の受注メモらしきものはあつてもまだ入手していない頃にあたる。彼が「パンセ」を入手するのは翌年の二月二十日である。——つま

り、ちやうど悟浄が流沙河の底で「醜い佝僂の乞食」に女偶氏（パスカル「パンセ」の哲学を語る妖怪）の噂を聞いて女偶氏の許を目指して旅を続けるようになったのと同じ体験を、中島自身がしていた頃の日付が『過去帳』末尾にも記入されているのである。

【注】

- (1) 奥野政元『中島敦論考』（桜楓社 昭六〇・四）
- (2) 佐々木充『中島敦の文学』（桜楓社 昭四八・六）
- (3) 勝又浩『Spirit 中島敦 作家と作品』（有精堂 昭五九・七）
- (4) 山下真史『中島敦『わが西遊記』論——自意識過剰をめくつて——』（『国語と国文学』平三・十二）
- (5) 『中島敦』（ちくま日本文学全集 筑摩書房 平四・七）
- (6) 『李陵・弟子・名人伝』（角川文庫 角川書店 昭六三・五 改版三十四版）
- (7) 『光と風と夢・わが西遊記』（講談社文芸文庫 講談社 平四・十二）
- (8) 木村東吉『中島敦『弟子』論——行動者の限界とその救済』（『国語と国文学』平元・十二）

- (9) 木村東吉「中島敦の〈歴史〉——堀辰雄を視座として」
(『中島敦 昭和作家のクロノトポス』双文社出版 平四・十一)
- (10) 丸善に問い合わせたところ、「MARUZEN II」も「MARUZEN V」も共に昭和十一年に製造販売を開始していることであつた。
- (11) 田鍋幸信『中島敦・光と影』(新有堂 平元・三)
- (12) 昭和十七年九月九日付の鈴木美江子宛絵葉書に「二冊目の本の原稿を漸く書き上げて昨日日本屋に渡したところですよ。」とある。
- (13) 『中島敦全集』第三卷(筑摩書房 昭五一・三)